

出展決定 招待アーティスト

内田望

1987年 神奈川県出身、東京都在住
多摩美術大学大学院美術研究科工芸専攻修了

内田望は、鉄を主素材に鍛金技法で動植物をモチーフとした彫刻を制作するアーティスト。生物が本来持つ特殊な能力と、人間が生み出した科学技術的装置を融合させることで、生物の機能や存在の魅力を機械的な造形として表現している。



梅沢和木

1985年 埼玉県出身、埼玉県在住
2008年 武蔵野美術大学映像学科卒業

美術家。インターネット上に散らばる画像を再構築し、圧倒的な情報量に対峙するときの感覚をカオス的な画面で表現する。瀬戸内国際芸術祭、Reborn-Art Festivalなどの芸術祭に参加。東京都現代美術館、森美術館、豊田市美術館、リトアニア国立美術館などに収蔵。CASHI 所属。



開発好明

1966年 山梨県出身・山梨県在住
1991年 多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
1993年 多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了

観客参加型の美術作品を中心に、2004年にヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展、2006年に妻有トリエンナーレ「越後妻有大地の芸術祭2006」に出品。2016年に市原湖畔美術館にて「中2病展」を開催。2024年「開発好明 ART IS LIVE—ひとり民主主義へようこそ」展を開催。また国外では、ベルリンのニューナショナルギャラリーにて「Berlin-Tokyo/Tokyo-Berlin」などに参加し国内外で発表を行っている。2011年以降デイリリーアートサーカスを企画し震災によって被害を受けた学校や仮設住宅に訪問して展示やワークショップを行った。



木村崇人

1971年 長野県生まれ、長野県在住
2003年 東京藝術大学博士課程修了

「地球と遊ぶ」をテーマに、風や光などの自然現象を利用した体験型作品やワークショップを国内外で展開している。人々が常識として理解している世界の姿と、科学的に観測される実際の現象とのあいだにあるズレに着目し、自然現象を素材としたインスタレーションとして可視化する。作品体験を通して、身近な自然やエネルギー、地域との関係を見つめ直し、人間が自然の一部として存在していることへの気づきを促す表現を行っている。



出展決定 招待アーティスト

こうざきまさたけ
鴻崎正武

1972年 福島県出身、神奈川県在住
2006年 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻油画修了

鴻崎正武は、日本画の伝統的技法を基盤に制作する画家。中国古代の理想郷「桃源郷」を起点に、南蛮屏風や洛中洛外図、ヒエロニムス・ボスなどの構図や金地表現を参照し、幻想的な動植物や異形の存在を描く。東日本大震災以降は、赤べこやこけしなどのモチーフを用い、「東北画」の可能性を問いながら、土地の記憶や文化を再解釈してきた。近年は屏風にとどまらず、円形画面や立体表現へと展開している。



しょうげんりょうじ
正元嶺至

1994年 兵庫県出身、大阪府在住
2017年 大阪芸術大学芸術学部工芸学科卒業

鉄を用いて立体作品を制作。
兵庫県の陶芸家のもとに生まれ、物心ついた時から粘土に触れ、またアニメにも興味を示しそれらが生活の一部であった幼少期を過ごす。
近年は、自身の人格形成を担う要素を組み合わせ、文明的な人間像の生成過程とすり合わせながら鉄を用いて人体像を造形する一連の行為から、「自身とは何かを問いながら価値を更新し続ける生成途中の人間らしさ」を垣間見ようと試みている。



ジュン・グエン=ハツシバ

1968年 東京都出身、ホーチミン(ベトナム)およびヒューストン(アメリカ)在住
1994年 メリーランド・インスティテュート、マウントロイヤル美術大学修士課程修了

1968年、東京にて日本人の母とベトナム人の父の間に生まれ、幼少時代を日本で過ごした後、アメリカで教育を受ける。
2001年より難民や社会的少数派をテーマに取り上げた「メモリアルプロジェクト」シリーズを発表、国際的に注目を浴びる。ヴェニス、イスタンブール、シドニーなど国際展に参加。
グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)、ホイットニー美術館、ポンピドゥーセンター、森美術館などに作品が所蔵されている。



たか けい た
高橋 匠太

1970年 京都府出身・在住
1995年 京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

光や映像によるパブリックプロジェクション、インスタレーション、パフォーマンス公演など幅広く国内外で活動を行っている。京都市京セラ美術館、東京駅100周年記念ライトアップ、十和田市現代美術館など建築物へのライティングプロジェクトは、ダイナミックで造形的な光の作品を創り出す。多くの人とともに作る「夢のたね」、「ひかりの実」、「ひかりの花畑」など大規模な参加型アートプロジェクトも数多く手がけている。



出展決定 招待アーティスト

ディジー バルーン Daisy Balloon

2009年 ユニット結成、神奈川県在住

バルーンアーティスト細貝里枝とアートディレクター・グラフィックデザイナーの河田孝志からなるアーティストユニット。2009年結成以来、「感覚と質」をテーマに掲げ、バルーンで構成された数々の作品を制作。それらは繊細さが細部まで行き渡った建造物を思わせる。また、彼らは日々、哲学を探求し、ディスカッションすることをフィールドワークとしているが、その眼差しは常に、他者との本質的な融合に向けられている。



Photo: Sai

ニシハラ☆ノリオ × 北園組

かぶりもの作家ニシハラ☆ノリオと音楽家北園組によるユニット。2026年結成。

ニシハラ☆ノリオ

美術制作会社で10年の勤務を経て、2004年より「被る、という行為をコンセプトに独自の表現で「カブリモノ」をメインに制作活動を開始。

2007年『かぶれる展示』と題し、自由にかぶれる参加型展示を金沢21世紀美術館で開催。これまで日本各地・パリ・ロンドン・マドリッドで行う。

近年は舞台美術・ワークショップ・インスタレーションなど制作範囲を広げ活動中。

北園組

北園優と北園あかねによる兄妹ユニット。兄の北園優は、奇才のピアニストでありながらひとところに留まらず、世界一小さなサーカス団『山猫団』の七代目団長であり、唄う踊る雑芸レビュー団『デリシャスウィーツ』では愉快的オルガンプレイヤー。スペシャルチンドンバンド『ジュンマキ堂とニューパラダイステンドン』ではアコーディオンと盛り上げを担当。民謡が得意の歌舞伎好き。妹の北園あかねはオペラ歌手でありながら兄の無茶な芸術活動に協力している。神戸市出身。



平澤賢治

1982年 東京都出身、東京都在住

東京とロンドンを拠点に活動する写真家、現代アーティスト。慶應義塾大学(SFC)にて人工衛星を用いたリモートセンシング技術を、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)にて写真を修める。サーモグラフィーを用いて有機体が内的に発する光(熱)を捕捉する手法により、生命現象を可視化する肖像表現を確立。ポスト・デジタル時代における生命や記憶のあり方を問いかける。



松井照太

1994年 京都府出身、京都府在住

2018年 京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒業

石の自然美や重さ、質量に関心を寄せ、山や川で採集した無加工の石を用いた立体作品を制作している。彫刻において不可避な重力や重量、支持という条件に向き合い、石と支持体とのバランスを通して、重力が可視化される状態を探求している。制作の背景には石を愛でる文化である「水石」への関心があり、現代的なマテリアルを用いることで、石と空間との関係性を捉え直し、新たな鑑賞のあり方を提示している。



出展決定 招待アーティスト

モジャヒド・ムサ

1990年 ナルシンディ(バングラディシュ)出身・ダッカ在住
2015年 チッタゴン大学美術研究所彫刻専攻修士課程修了

脱文脈化と変容の手法を用い、人間と動物の身体が置かれた社会政治的な位置付けを考察しながら本来の環境から切り離された動物の姿を通じ、文明や家畜化、そして経済システムにおける生命の「産業的副産物化」を問いかけている。また、バングラディシュ伝統の土着文化や職人の記憶を既製品やパーソナル・アーカイブと融合させることで、現代の消費社会、権力、そして自然と人間による介入の危うい境界線を浮き彫りにしている。



山本修路

1979年 東京都出身・千葉県在住
2005年 多摩美術大学油画専攻卒業

「大自然と人間の関わり」をテーマに日本各地でフィールドワークを続け、森に入りカエデの樹液を採取して作るメープルシロップ、米作りから携わる酒造り、林業についての考察や木材利用の歴史研究など、その活動は多岐にわたる。



義村環

2000年 鹿児島県出身、千葉県在住
2024年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業

身近な植物をモチーフに、ドローイング、絵画、立体、さらには空間全体を構成するインスタレーションへと表現を拡張し続けている。絵の具や布など様々な素材を媒体とし、日常に息づく小さな生命感を鮮やかに表現している。



資料に関するお問い合わせ

六甲山観光株式会社／神戸六甲ミーツ・アート事務局 広報担当（岡本、氏川）

TEL: 078-891-0048（平日 9:00～18:00） 広報用携帯電話: 090-7104-3645 E-mail: press@rokkosan.com